

## 「女らしさ」の表現と帝国主義

——田村俊子と金明淳の作品の比較を通して——

金\*  
玫 妊

### 一、はじめに

I…この女作者はいつも白粉をつけている。もう二十に成ろうとしていながら、随分濃い化粧をしている。誰も見ない時などは舞台化粧のような化粧をしてそっと喜んでゐる。(…中略…)

どうしても書かなければならないものが、どうしても書けない書けないと云う焦れた日にも、この女作者はお化粧をしている。また、鏡台の前に座っておしろいを溶いてる時に限って、きつと何かしら面白いことを思い付くのが癖になっているからなのでもあった。おしろいが水に溶けて冷たく指の端に触れる時、何かしら新しい心の触れをこの女作者は感じる事が出来る。そうしてそのおしろいを顔に刷いている内に、だんだんと想が編まれてくる——こんな事が能くあるのであった。この女の書くものは大概おしろいの中から生まれてくるのである。だからいつも白粉の臭みが付いて<sup>①</sup>いる。

II…ある人が、この詩を読んで評するに「女が鏡台の前で白粉をつけて、立ち上がったときに、スカートの裾についた白粉の粉が飛び散る匂い、その匂いをするようだ」といったのを私は聞いたことがある。ある程度は、この詩の匂いを嗅いだ人の言葉であると私は考えた。彼女の詩が女性的というよりももう一步進んで、この『白粉の匂い』がするのはどうしてなのだろうか？女性の書いた詩であるから女性の匂いがあるのであり、よって白粉の匂いがあるのだと漫然と言つてしまえばそれまでなのだが、しかし、そこには性格的にそのような原因がなければならない。ならばその原因は何か？<sup>②</sup>

右記の引用は、一九一三年一月「新潮」に発表された田村俊子の『女作者』の中の一文(I)と、朝鮮の女性作家である金明淳の詩『夢』を評した金基鎮の批評(II)である。叙述主体の違いはあるものの、それぞれの引用文に共通しているものは、「女性」の書

くものは、「白粉の匂い」がするというものである。リベッカ・コーブランドは、女性作家の作品に描かれる「化粧」や「白粉」によって作られた女の顔とは、自己主張をするという女らしくない自分、「ものを書く」女らしくない自分を女らしく見せるための仮面<sup>③</sup>であると述べている。「白粉」をする女の「女らしさ」とは、田村俊子が『女作者』を初出時に『遊女』と題したことをあげるまでもなく、男性が定義する女性性の二つの領域——母性と娼婦性において、後者に属するものである。「白粉」とはあるべき「女らしさ」の規範である母性とは対極にある「女らしさ」の象徴であり、男性作家とは違う「女作者」の独特な創作方法ともなるが、同時に金明淳の場合のように女性への人格的な侮辱や批判に利用された。若桑みどりとは、全体主義的な社会のなかでは「男性を秩序に固定させ、または逸脱や誘惑から連れ戻す家庭の女／母という女のプラス・イメージ」と「男性を、秩序から逸脱させるべく誘惑するファム・ファタルという女のマイナス・イメージ」<sup>④</sup>とが一对となつて形成されると述べているが、田村俊子と金明淳はこのように二極化の中で固定化された女性イメージや封建的な因習、男性中心的な規範などに抗い、近代の早い時期から個を希求する作品を発表した作家であった。しかし、その方法はそれぞれ違つていた。

田村俊子は、一八八六年東京の浅草区蔵前町に生まれる。演劇好きの祖父や母のもとで演劇に親しみ、文学の師として幸田露伴に師事したのも、原作者として演劇に対して口出しをしない露伴の人柄にひかれたからといわれている。一九〇九年、兄弟子であった田村松魚と結婚(入籍だけの事実婚だといわれている)、一九一〇年十一月「大阪朝日新聞」の懸賞小説に『あきらめ』が二等入選(一等の該当作品がなかったため首位となる)し、文壇にデビューする。翌年九月には「青鞥」創刊号に『生血』を寄稿、以降一九一八年に恋人である鈴木悦を追って渡加するまで、「新潮」「早稲田文学」「文芸春秋」などの雑誌に作品を発表し、作家として第一線で活躍した。金明淳は一八九六

「キーワード」 女らしさ／エクリチュール・フェミニン／植民地主義／帝国主義／新しい女

\*平成一五年度生 国際日本学専攻

年平壤に生まれる。一九一七年に『疑心の少女』で朝鮮の総合月刊誌『青春』の第一回懸賞小説に二等入選し文壇にデビューする。一九一九年前後には日本に留学、朝鮮最初の文芸同人雑誌『創造』の同人として本格的な文筆活動を開始する。一九二五年には朝鮮で、女性としてはじめての近代詩集『生命の果実』を上梓している。

加えて、俊子は作家としてデビューする以前、女優として「波」などの舞台に立った経験を持ち、金明淳もまた一九二七年頃から「友よ」「スギョン娘子伝」「花屋」「歌うとき」「若者の歌」などの映画に女優として出演している。近代以前には、女性が表現行為をする場はほとんどなく、女性作家も女優も、近代になって現れた新しい職業であった。当時朝鮮の新女性たちが「近代との同一視あるいは近代性の具現」を通して「自分自身の女性性を克服する戦略を選択」したとキム・ギョンイルが述べているように、近代による開明的な価値観によってそれまでの封建社会における父や夫に従属した受動的なあり方とは異なった女性の主体の獲得が可能になった。田村俊子と金明淳はそうした近代化の洗礼を受けて現れた新しい存在であった。特に両班（ヤンバン）（韓国の貴族階級）である父と妓生出身の母の間に生まれた庶子であるという出自を持つ金明淳の場合、自身の自伝小説の中で「私は他の家の娘が持っているような貞淑な夫人の娘という立場」ではないから、「妾」と呼ばれないよう懸命に「勉強だけを」して「その欠点」を隠し、「貞淑な女性にならなければならない」というように、出自を克服するために近代の文物を積極的に取り入れようとしている。

その一方で、近代においてはセクシュアリティの概念が、近代的知と権力の枠組みの中で創造されていった時代でもあった。生理学・医学・心理学などの科学的知によって、正常な欲望と異常な欲望とを描き出し裁断し、「倒錯」や神経衰弱・ヒステリーといった、セクシュアリティについての様々な言説が生産され、増殖していった。そのような過程の中で近代の諸個人は、自らをセクシュアリティの主体として自己を形成し、セクシュアリティは近代国家が身体を通して個人を管理する装置となった。そのゆえに、女性の主体獲得が可能になった一方で、近代においては、それ以前には見られなかった強固なジェンダー規制が形成され、女性の生き方や性が、国家の管理のもとに置かれることにもなった。「女性性」や「女らしさ」という名目もまた、女性のセクシュアリティを統制する装置として機能した。家族主義、良妻賢母主義に基づいた「女らしさ」が規範として定着していったのに対し、母性につながらない性欲や欲望はヒステリーという「女らしさ」の病として見出されていった。

このような統制の中で、自己を近代的な自我に目覚めた「新しい女」として定位し、

女性の性の自己決定権を主張してきた「青鞥」の女性たちが、「家族」を拠点として「自律的に近代社会の規律を内面化し「国民」として自己形成」した結果、母性主義のもとに国民国家に囲い込まれ保守化していくその過程や、朝鮮の新女性たちが民族の問題を優先することによって女性問題が民族解放や階級解放へと取り込まれていく過程はこれまでの研究の中で明らかにされている。それならば、母性主義、国家や民族の言説から逸脱する存在は、どのように評価されたのだろうか。

田村俊子に対して、平塚らいてうは「特種な哲学」も「新たな恋愛の自覚」もない「古い日本婦人」と批判している。また水野盈太郎は田村俊子を、いまだに「女の盲目」の中に身を置いており、「少しも苦悩して居ると思われる処がなく、その「感覚が因襲的」で「類型」的であり、よくいる「安易な、懶惰な」「通俗」的な女性であるとして、その「新しさ」を否定している。また、金明淳の場合その批評の主なもの、作品よりも彼女の出自に注目して、その文学の傾向を、「妓生」である母方の「悪い血」や複雑な家庭環境の影響による「頹廢」的でヒステリカルなものであるという批判なのである。良妻賢母の規範から逸脱する女のセクシュアリティを描く二人は、因襲的な「女らしさ」に沈殿している（他者）として、私生活をスキャンダラスに書かれたり、「性的な逸脱者」として非難されたりした。やがて俊子は鈴木悦との新たな恋愛によって渡加して約十八年の間日本を離れ、金明淳は国内に居場所をなくして国の外部へと去っていくことになるのである。

女性が国家や民族という「大きな物語」を通して主体を獲得しようとするとき、国民国家は帝国イデオロギーに加担してしまうことになる陥穽や、民族独立や階級闘争の中に女性解放が解消されてしまうという構造を持つのに対し、そのような「大きな物語」の周縁で「女性性」の中に自己の表現の方法を模索していた田村俊子や、同時代の知識人たちによって表現する主体を「女性性」の中に封じ込まれながら自らの言葉を模索していた金明淳は、国家そのものから排除されていく構造が見られる。

新しい存在として過剰な視線に晒され、同じように「女らしさ」の言説によって排除されていく田村俊子と金明淳であるが、「白粉の臭み」を戦略として自ら使っている俊子と、男性知識人たちから「白粉の匂い」の中に押し込まれる金明淳のあり方に象徴されるように、帝国の女性である俊子と、植民地支配下で書く金明淳とではその表現主体のあり方は違ってくるのではないか。その差異はどのようなあらわれてくるのだろうか。本稿においては、以上のような問題意識のもとで、田村俊子と金明淳の作品の分析をしていきたい。

二人が作家として活躍していた時期（一九一〇年代の日本、一九二〇年代の朝鮮）は、それぞれちょうど〈新しい女〉という言葉が社会に流布していた時期と重なる。そのためまず、二人が作家として活動していた時期の社会的状況について概観しておきたい。俊子も金明淳も〈新しい女〉と目されていたが、〈新しい女〉として彼女たちが経験する事柄は当然差異があり、またそうした経験や歴史的な脈絡、社会的状況の違いは、作品のテーマの選択にも影響を及ぼしただろうと考えられる。〈新しい女〉たちが直面した問題は両国においてどのような違いがあり、また〈新しい女〉の同時代的状況と、文学的テーマはどのようにあらわれるのかを概観したい。

## 二

田村俊子が作品に描くのは、主として恋愛の後や結婚において両性の間にあらわれる性やジェンダーをめぐる齟齬という現実的な問題である。一九〇九年俊子は、幸田露伴門下の兄弟子であった田村松魚と結婚する。俊子が『あきらめ』入選以後職業作家として活躍するようになる頃には松魚の筆力は完全に衰え、家計は俊子一人で支えている状況になっていた。随筆『簾の蔭から』に書かれている二人の生活は、「束縛も顧慮もない」「自由な生活」「家庭」<sup>(16)</sup>なのであるが、俊子はそんな生活の中で、

私はこの頃、時々、男のさも男性らしく力強そうな厳つい骨格を見てみると、その骨組を粉みちに粉碎してやり度くなる事がある。そうして鎗をもったさも男性らしい太い声を聞いていると、その声の再び出ない様に咽喉をひたりと塞いでしまいい様な気のすることがある。男の男らしい外形の権力と云ふようなものに魅せられてくると、私はこうした苦しい反抗に責められるのである。

と「骨格」「太い声」などの「男らしさ」の「外形の権力」に「魅せられる」と同時に、自己を圧迫する「権力」として認識し、「苦しい反抗」に駆られるジレンマを書いている。また別の随筆『微弱な権力』では、この「権力」を「私の生活には、ある微弱な権力が絶えず従属してゆく」と書いている。その権力は「微弱」でありながら、俊子の「心の両翼」を「いつも軽く押え付けて」いる、と述べている。一見平等な立場にあるように思える男女の間にしのびこんでくる、「微弱な権力」＝「私」を「封印をするやうにぴたりと密閉」してしまおうとするこの「微弱な権力」としての「夫」＝「男」

「他者の存在に対する拒絶反応は、『私』が、恋の相手との結婚を決めて遠のいてしまった女友達『あなた』に宛てた手紙形式の小説『悪寒』<sup>(18)</sup>では、次のように描写されている。

然うすると私は真つ闇な底の底の方へだんだんと自分の身体が落ち込んでゆく様な心持がしてくるんです。私は柱へ掴つて、柱をぐいぐい揺ぶったり、大手を振つて座敷の内を飛んで歩いたりするんですよ。底の方へ身体が沈んでゆくのが恐しくつて堪らなくなるんです。……（中略）……私は何でも注視する事ができなくなりまして。物をちつと見詰めていると、それが大きな真つ暗な陰影になって私の目の上に塞がってくるんです。その陰が私の鼻孔と口の上とを封印をするやうにぴたりと密閉するんです。……（略）……それで家のなかの壁がうるさくつてうるさくつて仕方がない時があるんです。どうかしてこの壁を突き崩してやり度いもんだと思い始めると、私はもうかつかつとして来ます。この間の朝も、ある日の顔を私はふいと見たんです。然うすると、あの鼻の尖きの丸いのが気になって気になって、どうしても削らずには居られない気がしてきました。（傍点省略……論者）

「私」は「家のなか」で、「真つ闇な底の底の方」へと「落ち込」み、「沈んでゆくのが恐しくつて」じつとできていることができない。そして「家のなかの壁がうるさくつてうるさくつて仕方がなく」、「物をちつと見詰めてみると、それが大きな真つ暗な陰影になつて私の眼の上に塞がって」、「鼻孔と口の上」まで「封印をするやうにぴたりと密閉」するのである。

「私」は女友達「あなた」と、「一銭の玩弄」や「千代紙」「丹色と水色の絵日傘」などで遊び、昔に失ってしまった「少女」の頃の空間を作り出し、「あなた」との生活を考へては、「大きな海の真中にでもゆらゆらと乗り出たやうな好い気」持ちになる。「私」が「あなた」との関係の中で享受するのは、同質的なもので満たされた自足的でナルシスティックな「少女」の空間であり、「私」の感性はその中でのみ居心地の良さを感じる事が出来るのである。「私」は、「あるじ」を愛しいと思う気持ちを持つてはいるが、それゆえにますます苦しみことになる。「私」が家の周囲のものに圧迫されるのは、「私」が志向する居心地のいい、自足的な「少女」としてのあり方と、そんな自己を押し殺して夫につくす「優しいしほらしい紫苑の花のやうな女」「従順な可愛らしい女」すなわち家父長制の求める〈良き妻〉の規範そして「私」自身を内面から縛っている「女

らしさ」の規範との間で葛藤しているためである。そうした規範の要求は、「うるさくって仕方のない」「家」の「壁」として「私」を囲み、「塞がって」くるのである。

そのような規範の圧迫を攪乱する方法として田村俊子が作品の中で試みたのは、『女作者』に描写されているように「白粉」による「媚」であった。それは文字通り男性への依存と従順を前提とした「媚」ではなく、既存の男性中心の意識や秩序に固執する男性に対して、その秩序から逸脱させるべく誘惑しなおかつ「白粉」の下の素顔を見せないことによって男の欲望をはぐらかし、男女関係における自己の定位を遅延させていくものであった。つまり俊子の創作手法とは制度を近代的な主体の構築によって超越していくのではなく、「白粉」によって「女らしさ」を表現しながら同時にそれをずらしていくものであった。

このように男女の相剋をテーマにした作品は俊子の主要テーマでもあったが、男性作家のものでは森田草平の『煤煙』や岩野泡鳴の『男女と貞操問題』などがあり、一九一〇年代の日本において恋愛や結婚をめぐる「新しい女」と男のすれ違いや相剋が、男女がともに共有する文学的テーマであったことがわかる。これに対して、朝鮮においては近代に新しく浮上した男女関係はどのように文学に表現されたのだろうか。次章では、金明淳のテクストを考察することによって、みていきたい。

### 三

一九二〇年代朝鮮の新女性性は、「青轡」との関係の中で論じられることが多いが、これは、この時代の代表的な新女性として活躍した、金明淳、羅蕙錫、金一葉といった女性たちが、「青轡」が創刊され、「新しい女」の言説が盛んであった一九一〇年代に日本への留学を経験し、その影響の色濃い「新女子」(一九二〇年三月創刊、同年六月四号で廃刊)を発刊していることにもよる。これら一九二〇年代に活躍した朝鮮の女性たちは、「新女性」と呼ばれた。韓国では急進的女性解放論者に分類され、一九三〇年代に登場した女性作家と区別して第一期または第一世代の女性作家とされる。以後本稿でもそれにならう。

朝鮮の第一期女性作家たちは、『青轡』に代表される日本の新しい女がメディアや社会によって非難に晒されながらも、社会に受け入れられていったのとは違って、社会から徹底的に排除された。金一葉は三十代で出家し、金明淳は日本の脳病院で死亡し、羅蕙錫は離婚後画家として再起を図りながらも結局行き倒れ同然の死に方をしている。

こうした『青轡』の女性たちとの違いについて、〈新しい女〉の受け入れ状況や女性の教育環境の層の違い<sup>(20)</sup>、早婚問題、儒教の浸透率の違い、日本の新しい女が岸田俊や清水紫琴といった前世代たちと比べてむしろ穏健化したためであるという指摘や、植民地支配下という状況や民族の問題が作用したという論などがある。

特に朝鮮における早婚問題は新女性の恋愛・結婚に関連して社会問題とまでなった。当時朝鮮では、法的に婚姻が可能になるのは、男子が十七歳、女子が十五歳以上であったが、家父長の決断でそれ以前に結婚する場合が多く、幼い夫を年上の妻が育てるということも一般的に存在した。早婚の弊害として指摘される問題はさまざまだったが、新女性との関連から述べると、教育を受けた男性が旧女性である早婚した妻を捨て、新女性と結婚する傾向が社会問題として論じられるまでになったことである。金一葉は、学校教育を受けたために適齢期を逃した新女性たちの恋愛と結婚の相手となる対象が、既婚男性となる他ないことを述べる。また、金一葉は次のようにも述べている。

在来のすべての伝統と観念から遠く離れて生命に対する清新な意味を吹きいれようとしている私たち新しい女、新しい男は何よりも私たちの人格と個性を無視する在来の性道德に対して積極的に抗わなければなりません。そして多少時代におくれた気がしないでもありませんが、イブセンとエレン・ケイの思想に共感するようにしましょう。<sup>(21)</sup>

ここには、「伝統」＝家父長の命令による早婚を、「人格と個性を無視した」「性道德」であるとし乗り越えようとする姿勢が見える。エレン・ケイの影響を受けた金一葉は、既婚男性との恋愛よりも、愛のない結婚の方が不道德であると述べ、新女性たちの恋愛を擁護している。実際に新女性の結婚問題は深刻であった。適齢期を逃した新女性の「老处女」(韓国語のオールドミス)、あるいは恋愛結婚失敗者としての「老处女」の登場や、新女性が妾・第二夫人となる現象もこの時代に多く現われている。新女性たちの場合、結婚後に男がすでに結婚し妻と子供がいたことが発覚するということも多く、「妻のいる男と恋愛する悪い女」だということは知っているが、永遠の愛まで誓った彼との別れは容易くはない。だから仕方なく男の「妾」となってしまったという女性が増加し、新女性の第二夫人問題としてあらわれるのである。<sup>(22)</sup>

しかし、教育を受けた新女性に職業につき自立することもまた難しかった。総督府主導の教育方針によって、朝鮮における女性教育は良妻賢母教育であり、専門知識や技

術を習得するには日本やアメリカなどに留学しなければならなかった。このため、新女性に結婚によってしか生きるすがなく、第二夫人問題は容易く解消されなかった。

金明淳が作品に描く男女の關係は、このような時代的状況を反映し、ほとんどが既婚者と未婚者、あるいは双方とも既婚者の恋愛關係であつた。その傾向は、「貞淑な女性」にならなければいけないというさきの引用と矛盾しているように思われるが、金一葉の主張と同様に、「貞淑」とは、男女の相愛を基底とした夫婦關係の中でこそ有効性を發揮するものとして金明淳の作品の中に描かれているのである。

例えば、一九二六年に發表された『私は愛する』<sup>(29)</sup>は、借金のかたにソ・ビョンホと結婚したソ・ヨンオクが、女学校時代の友人スニに七年前に出会った男を今でも愛しているという告白をすることによって急展開を見せる作品である。ヨンオクの夫は、彼女にかけたお金がもつたないから離婚しないとスニにいうような男である。実は、ソ夫婦が借りている家の主人が、七年前に授業料を払えずに駅前で饅頭売りをしていたヨンオクを助けたチェ・ジョンイルその人であることが後に分かるのだが、ヨンオクの話聞いたスニは「愛情のない夫婦生活は売淫」と即座に答え、ジョンイルのいる前で、「外部の事情で実現することができなかったことも、内部の反抗によって不順な繋がりやを断ち切り、再び純化されて、目的地に向かつて戦つてい」くことができると、ヨンオクの代わりに夫に離婚を申し入れる。ジョンイルもまたこうした女たちの貞操觀念に共感をあらわす人物である。

「淫乱な奴等め」と「狂人」のように喚く夫ソ・ビョンホに対して、ジョンイルはヨンオクに次のように語りかける。

「あの名前も知らなかった乙女は、私の心の中から湧いてくる最も美しい言葉をすべて聞かなければならない私の永遠の憧憬です。さあ、王女のような乙女ではありませんか。彼女を誰が貞操を失つた娘であると言うでしょう。まして彼女の八ヶ月の間、人を金銭で買うものであると考えている誰かとの夫婦生活が、彼女をもっと清くしたことでしょ。…(略)…」

前近代的人物の典型として描かれているソ・ビョンホに対して、真実の愛を秘め続け忘れないヨンオク、そんなヨンオクの愛を後押しするスニ、ヨンオクを受け止めるジョンイル、という近代的な価値観を内面化した人物の理想を対置しているこのテクストは、「金銭」による形だけの夫婦生活は、ヨンオクの「貞操」を損ねるものではな

く、むしろ彼女を「清く」するものであるとする。「貞淑」さや「貞操」というものは、「金銭」で買うものではなく、互いに愛しあう夫婦の關係において成立するものであることが主張されているのである。

ジョンイルは、ヨンオクと出会ったその日にフランス留学に出発し、「弱い民族の一つであるために、勉強する責任も多く」帰国するまでに時間がかかり、ヨンオクのことを忘れられずにいながらも探せずにいた。ヨンオクはその間に無事学校を卒業するものの、経済的に困窮し、ジョンイルへの思いを胸に秘めたまま借金をかたにソ・ビョンホと結婚する。ジョンイルはこのようなヨンオクの境遇を自分が不在であつたための〈受難〉として理解し、ヨンオクを「最も美しい者」、「可哀想なあなたを、私は愛します」という。女性の純潔と貞操を拘束する規範が強く、寡婦の再嫁も許さなかつた朝鮮の封建社会と比較すると、こうした女の受難が伝統社会の強要によって行われるのではなく、女性自身の意志によってなされ、女性自身がその苦悩を引き受けている点、また女性の「貞操」における主体性によって構築された貞操観を表明し男性もまたそれを受け入れている点が、このテクストの新しさといえるであろう。

だが、互いの愛を確認しあつた二人がその後どうなるのかについて、テクストは曖昧なまゝになっている。

彼らは互いに生命をかけて長い間戦つた。ソ氏は失敗するよりなかつた。

この日の夕方、東崇洞のチェ・ジョンイルの山亭には大きな火が上がつた。いい家が焼かれると人々は惜しがつた。しかしその炎の中に声がして伝えることには、「愛する人よ、美しい言葉のすべてはあなたの名前である」

と、

「私は愛する！」

「私は愛する！」

と言つた。

引用した文はテクストのラストであるが、ヨンオクとジョンイルがその後どうなつたのか、二人が山亭とともに焼かれたのか、それとも二人が山亭を焼きながら互いの愛を誓い合ったのか、これだけでは読み取ることができない。七年前に一度会つただけの男女がその七年間互いに恋い合つて、突然、偶然に再会し愛を確認して結ばれるというテクストの展開は強引すぎるように思われる上に、その愛の内実が問われな

いまにただ贅美するだけのラストになっている。テキストは『私は愛する』というタイトルの通り、女性が「私は愛する」と主體的に宣言し、行動におこすということに主な力点が置かれているといえる。このような物語構造は、朝鮮時代の代表的な古典小説である「春香伝」の構造と非常に似ている。「春香伝」は、妓生の娘・成春香と両班の息子・李夢龍とが恋に落ちるが、すぐに離れ離れになってしまう。李夢龍の不在中も春香は彼に対する愛を秘め続け、そのために役人に誘惑され困難にぶつかるが、やがて科挙に及第した李夢龍が現れて二人は結ばれるというストーリーである。二人の恋物語の劇的展開と共に、役人の横暴に抗するヒロイン・成春香が庶民の反抗精神を代弁する人物として描かれており、人気を得ている物語である。成春香に男の不在の間不正を働く役人に虐げられる民衆の姿が仮託されているとしたら、李夢龍が民衆を虐げる役人から解放する正義として描かれている。これを参考にすれば、金明淳を操ろうとする夫に抑圧されながらも愛を貫こうとするヨンオクを虐げられる民衆または民族、「弱い民族」のために、「フランス」で「勉強する」ジョンイルをそこからの解放者として金明淳は描こうとしたのではない。民族のために「勉強する」〈不在の男〉は、自らの愛に誠実であるヒロインを解放し受容し、彼女のアイデンティティを支える男としてテキストでは描かれている。このように、金明淳のテキストにおける〈不在の男〉の存在や、彼への希求は大きな比重を持っているが、さらにこの〈不在の男〉について金明淳の他のテキストを考察してみたい。

一九二五年に発表された『振り返るとき』<sup>31</sup>でも、主人公ソヨンは〈不在の男〉を思い続ける女性として描かれている。ソヨンは、両親を早くに亡くし、叔母エドクに育てられた。今は女学校の英語教師をしているが、修学旅行で行った仁川の測候所で理学士ソーン・ヒヨスンと出会う。ヒヨスは妻帯者であり、旧女性である妻ウンスンに新しい教育を受けさせるため、エドクに預けようとしてソヨンと再会する。ヒヨスンと出会う以来恋わずらいになってすっかり健康を害し教師もやめてしまっていたソヨンに、叔母のエドクはしきりに結婚をすすめる。その内、ソヨンとヒヨスはヒヨスンの妻ウンスンが見ている目の前でハウプトマンの『寂しき人々』をめぐる文学談義をしながら互いの気持を確かめ合う。だが、その会話を理解することができないウンスンも、二人のただならぬ様子に警戒心を抱くようになり、エドクによって二人は遠ざけられる。ソヨンは結局他の男と結婚し、二人は作品の中で現実には結ばれることはないが、遠く離れた場所から精神的に愛し合い、互いに「研究」と「労働と修学と博愛」に精を出し、いつか「自由」の「時」を待つという結末になっている。テキストの

主題は、互いに既婚者であるヒヨスンとソリヨンとが交わす精神的な愛であり、物語の構造は、〈不在の男〉への愛による〈女の受難〉の克服である。

イム・ウンギョンは、植民地女性が、近代的な価値を身につけることによって父・兄・夫による封建的な家族秩序から解放されながら、民族解放という課題を前に「民族／国家想像」を、「虐げられた母」「失ってしまった父」「外勢によって倒れた父」として表象し、〈父／民族／国家〉の復権への希求を内面化し、結果として旧来の家父長制の性道徳、ジェンダー役割、良妻賢母言説に取り込まれていく原理としてはたらいとを論述している。<sup>32</sup>個の解放をうたつて家父長制から飛び出した女性が、自己のアイデンティティ形成のために、「民族／国家」＝父の言説に帰ってくるというこの論述を参考にすると、金明淳のテキストに描かれる〈不在の男〉は、それを希求しながらも決して手の届かない祖国という、植民地女性にとっての〈祖国の不在〉状況を暗喩しているのではないだろうか。〈不在の男〉〈不在の祖国〉によって、テキストの中の植民地女性の主体は、対象を得ることができないまま宙吊りにされ、テキストの中に描かれる恋愛もまた、現実性のないものとなっているのである。

#### 四

恋愛に焦点を当てた『私は愛する』に対して、一九二五年五月「朝鮮文壇」に発表された『夢解きをした日の夜』は、家の外に出た女性に対する世間や男たちの視線に対する主人公の反応や心理に焦点を当てた作品である。

詩人であるナムスクは数日前に、彼女の思い人である既婚男性Y氏と真つ青な空の下で向かい合つて「お辞儀かお祈りか」をするのだが、その後、どういふわけだか周囲の人々がナムスクを汚れた悪人にして非難し騒ぐ夢を見る。ナムスクは既婚者であるY氏から身を引きながらも、弱い自分が「文学を一生懸命進めていくといつても」「自分が進んだだけの足跡を記録して置く勇氣がな」く、鬱々としていた。文学に精進するよりもまだ自分の心の片隅にいる「影」（おそらくY氏のことであろう）の「私の力でああなたの不幸を癒してあげられるだろうか」という甘い言葉を夢見るナムスクは、迷信めいた期待を持って、自分が見た夢の夢解きをするために友人の漢学者のもとを訪れようと街へ出る。

伝統的な朝鮮社会では、女性は外に出ることはほとんど許されず、また外出するときには肌を隠し笠で顔を隠すなど厳しく制限されていたが、近代になって女学生が登場

すると、それまで足首を隠すまでに長かったスカート（裳）を通学のために歩きやすく短くしたり、洋装をしたりするなど女性の衣服に変化があらわれ、また街を歩く女性の姿も増えた。だが、街の通りや繁華街といった社会空間の秩序は相変わらず男が一方的に女を見ることを許容する空間であり、ひとたび外の世界に出た女は、男性たちの視線にさらされ、自分に対する無礼な視線に対して無力であった。暗い道を歩いていたナムスクが明るいうところに出了たとすぐ彼女の姿は男たちの視線にさらされた。

暗闇の中にいたために、今まで人々が彼女の前をバタバタと過ぎていっても、彼女の姿が他人に見えることはなかったが、弱い光が差したとき、専門学校の学生らしい青年たちが通り過ぎながら各々外国語でそれぞれ、

「道に迷った羊みたいだね。」

「びつくりするほど綺麗だな。」

「美しい。」

「きれいだね、その身体！」

と騒々しく通り過ぎていった。ナムスクはからかうような声が不快で、心の内で、

「悪いやつら、男が他人の顔ばかり見るのか！」

と、早く通り過ぎてしまおうと、八雲台へ向かい、景福宮を過ぎてひたすら歩いていった。歩けば歩くほどその道は暗く恐ろしかった。<sup>(33)</sup>

「専門学校の学生らしい青年たち」は、ナムスクの姿に一方的な視線を浴びせ、彼女にはわからないだろうと外国語で口々に評価を下す。ナムスクは、やっとたどり着いた友人の夫である漢学者の家でも、「あからさまに自分に笑いかけ奇妙な目線を向けてくるような徐某」から、Y氏について誤解され、不快な言葉を投げかけられる。それだけでなくとも神経を昂らせていたナムスクは、自分への徐氏の詮索的で無遠慮な言葉と視線に気分を害し、夢解きをする前に家に帰ってくる。ナムスクはその日一日にあった専門学校生や「徐某」からの「侮辱」や「誘惑」などを思い出し、やはり「甘い夢」をそのまま書くような詩ではなく「人間の生活」から磨いていくような「勇敢な貞調で書くことを悟る」ところでこのテキストは終わっている。

物語の内容としては、前半部分において「一方的に「見られ」「評価される」対象であったナムスクが、そんな対象であることに「侮辱」を感じることによって、また詩を書く

く意欲を取り戻し、「見る」「描く」主体を取り戻していくという、近代女性ナムスクの自我を描いた物語であるといえる。このようなナムスクの姿には、実際に詩や小説を書く女性作家であり、出自などによって様々な視線にさらされていた作者・金明淳自身の姿が投影されているだろう。

だが、この『夢解きをした日の夜』において文学への新たな決意を示しながら、金明淳は一年後『私は愛する』において何故再び女の社会アイデンティティを男女の恋愛に収斂させていくのだろうか。

金基鎮は、冒頭に引用した批評の中で、「彼の詩が女性的というよりももう一歩進んで、この『白粉の匂い』がするのはどうしてなのだろうか？」と疑問を提起して、彼女の過去をよくは知らないとしつつも、「彼の母親」が「曖昧女性（妓生？）<sup>マヤ</sup>」だったこと、「彼の叔母たちもまたそうである」ことを指摘し、「彼の血管の中には彼の母の血とまたは彼の叔母たちの血が流れている」と論を展開していく。金明淳をして「一個のメランコリックな女性」にならしめたのは「母親の方の不純な不浄な血液」と「妾の子という立場」であり、「頹廢的気分を持つようになったことも彼の家庭内の環境」によるものであり、また「その憂鬱と頹廢が相合」して現われるようになった<sup>(34)</sup>のが「ヒステリー」であると言述していく。

金基鎮は続けて、金明淳が「朝鮮で文人（マヤ）<sup>マヤ</sup>」として行動（マヤ）<sup>マヤ</sup>するようになったことも、文学的修養を重ねたからというよりも、その主要な理由は、朝鮮で見物しようにも見ることの難しい文学女性の中の一人だという理由<sup>(35)</sup>からにすぎず、彼女には「何か独特な主観」があるわけではないとする。金基鎮はそもそも金明淳の作品をほとんど読むこともなく、金明淳の文学の特徴や性格を、その母方の「不純な不浄な血」による「ヒステリー」や「メランコリック」という「女らしさ」の病とむすびつけて批評を展開している。彼女の人格や文学をおとしめているのである。金明淳がその作品の中でいかに彼女自身の苦悩を描写しても、それが一個の人間の苦悩として正当に捉えられることはなく、彼女の「不純な不浄な血」による「ヒステリー」としか捉えられないのであった。

金基鎮をはじめとした朝鮮の男性知識人たちのこのような偏見に満ちた視線に、金明淳は朝鮮には「お前のためのパンがない、家がない、友がない<sup>(36)</sup>」と母国を去って自分のためだけに生きてみるようにと自分自身に言い聞かせる。

タンシル、いま一度はただお前のために立ち上がってみよう、すべてを忘れずべての情を退けて、もう一度立ち上がろう。

そうしてお前はどこかの街に行き、ただお前の一身の栄華だけのために知識を得る。

ああ、だが去っていく弾実よ、去らせる朝鮮よ、お前たちはもう一度話をする必要があるのではないか？どうして話し相手にもなってみる、人がいないのか、どうして自分が生んだものを抱く情がないのか、どうして、弱いこの身体が遠く去って行くこととするのに涙がないのか。<sup>35</sup>

ここで金明淳が呼びかけている「朝鮮」とは、自分を「追放」「幽閉」<sup>36</sup>しようとする植民地朝鮮の男性社会である。

ジュヨン<sup>37</sup>は最後まで利己主義者である日本人たちに虐待を受け、騙されるが、タンシルはその反対に朝鮮人でありながら、日本人の生活と感情に同化した朝鮮人たちに虐待を受けたのだ。<sup>38</sup>

と金明淳がテキストに描き出したのは、封建的な因習やジェンダー、セクシュアリティにおける制度的な矛盾が、実は日本の植民地統治の政策によって前時代よりも強化されたものであったということである。F・ファノン<sup>39</sup>は、植民地の統治権力の主体は、強い家父長的権威を指向し、それに相応して国家の縮図である家族の構造にも自動的に家父長的な権威が強化されると述べている。また、ヨハン・ガルトゥング<sup>40</sup>は「帝国主義」とは、集団間、とりわけ国家間の支配関係として理解される。それは巧妙な仕組みをもつ、国家の枠を超えた支配関係の一形態であり、中心国の中心部が周辺国の中心部に両者の共通利益のために樹立する橋頭堡の上に成り立つ<sup>41</sup>と論じている。すなわち中心／周辺とは、対立しながらも相互に依存しあう関係にあると述べているが、戦時体制に突入しつづつあった日本は戦場へ送る兵士育成のために母としての女性を要求し、朝鮮社会もまた民族言説によって女性に母性を求めたが、結局それは日朝双方にとっての共通利益となり、女性への抑圧に対する両国の関係は不可分になるのである。

金明淳は近代化の潮流の中、近代的な価値である「愛」と「勉強」によって、自己に付与された妓生の娘というステイグマを克服しようとした。彼女の作品が作品として正當に評価されるためには、「妓生の娘」「妾の子」という社会的なレッテルからまず自由にならなければならず、傷つけられた名誉を回復させるために新たな貞操観

を打ち出していくが、しかし彼女が自己を形成しようとしたとき、日本の支配下にある民族の問題は無視することの出来ないものであった。

金明淳は朝鮮の人間として男たちと共に祖国によって救われ、受け入れられることを希求したのである。だが、日帝植民地下の朝鮮は、むしろ近代以前のジェンダーに対する封建性をより尖鋭化させ、女性を民族や家庭の中に囲い込んでいき、また朝鮮人として抗うべき他者であると考えていた帝国日本と利益を共にする朝鮮の男性たちによって、金明淳は二重に疎外されるのである。

《不在の男》への未練を捨て切れないうまま、自分を身体として見ようとする男たちの視線に抗して書くことへと向かうナムスクにあらわされているように、金明淳は自分だけのための「知識」によって主体を立ち上げていこうとするが、植民地の女性という他者であり、母方の「悪い血」という女性性に囲いこまれた他者という二重の他者性の中、その試みは挫折するのである。

## 五、おわりに

以上、田村俊子と金明淳のテキストを考察した。彼女たちはそれぞれ女というジェンダー配置の中で作家活動を行った。

田村俊子のテキストでは、男女の間に侵入して女性を抑圧するものを、制度による普遍的な権力として認識し、その力に対抗するために「白粉」という「女らしさ」を利用した創作方法を選択した。そのテキストの中の男女は互いに吸引しては反発することでもしる関係を維持させていく。「女らしさ」の欲求とそれに対する反発と葛藤の告白には、それがどんなに白粉を塗る女という「女らしさ」をなぞるものであっても、そこに個としての自己を見出すことが出来る。

しかし同時に、田村俊子は作家として活動した時期の大半の期間、田村松魚と結婚した状態（入籍はしていない事実婚）にあった。「白粉」によって「書く」女作者が、たとえ「遊女」にその身をやつていたとしても、亭主への執着を断ち切れない彼女は、一夫一婦の制度をくつがえすような人物ではない。俊子の夫である田村松魚が書いたと思われる俊子論では、俊子は「思想や、情緒の上では家庭の人として随分危険な女性」だが、「実行の上では」「分別あり、思慮ある健全な婦人」であり、「人形の家」のノラのように、事故の思想なり考えなりを徹底させるために、夫を捨て、子を捨て、家を捨てて逃げ出すようなことはなく、「自覚してからのノラが、自覚は単に自覚として、



矢張りそれ以前のノラのように、夫の世話をしたり、家の面倒を見たりして居るような人」と評されている。俊子は、大胆に性を描きながらも、「妻」としての自分の立場を逸脱することはなかったのである（それも鈴木悦との恋愛がはじまる前までのことである）。

そのために、女作者の「白粉の匂い」は非日常的、演劇的空間を作り出して、女と男、夫と妻という社会的制度的に付与された役割を逸脱することを志向するものでもあるが、同時に、再び「妻」という位置に着地してしまうことによって、男性の持つ画一的な女性像＝媚を売る女性像を強化、再生産してしまう危険性も有する。そして女作者は、「白粉」を落とすことによって、「妻」という役割に戻ることもできる。つまり女作者にとって「白粉」があくまでも非日常的な空間を作り出す装置であったのである。これに対し、「妓生」という出自からその作品に「白粉の匂い」を読まれる金明淳にとっては、「白粉の匂い」という他者から押し付けられた性的な表徴を彼女自身の人格として侮蔑される現実であり、日常そのものであった点で、二人が直面していた状況は大きく異なっているのである。

俊子が貞淑な妻という女性の個性を無視した画一的な女性像に抗して「白粉」を利用したとすれば、金明淳は娼婦としての女性像への抵抗のために周囲から付与される「白粉の匂い」から逃れ、「妻」という社会的に保障されたアイデンティティ目指していた。どちらも個人を無視した「良妻（賢母）／娼婦」という家父長制の中の女性のステレオタイプに抗し、個としての自己を主張したが、両人の表現方法はそれぞれが置かれた状況によって正反対の様相を見せているのである。

金明淳のテキストでは、女性を、主体を持たない疎外された身体として見る封建的で世俗的な男性／先進的で民族の行く末を憂い個としてその精神性を認めようとする男性、前近代／近代、封建性／先進性の二項対立の中で前者が女性を抑圧する排除すべき価値として認識され、後者は女性を解放するものとして理想化されている。

だが近代的な価値に目覚めた女性を受け入れ、愛し、保護する存在として理想化されたこの男性は、不在であることによって、失われた〈父＝民族／国家〉を想定させる存在でもある。女主人公はこの〈不在の男〉を対象に自我に目覚めた〈新しい女〉としての自分を構築しようとする。〈不在の男〉たちは朝鮮の新時代を導いていく理想的なパートナーとして描かれているが、その裏面は失われた〈父＝民族／国家〉を復権させようとする民族言説の中で女性を他者化していく朝鮮そのものでもある。また、さきに述べたように帝国の中心部と植民地の中心部とは、共通の利益を追求する一面

がある。互いに敵対するはずの民族と帝国の言説の一致の中で、女性の自我への希求は、行き所をなくす。そのために金明淳のテキストは封建性を排し先進性を身につけることを目指していくということを繰り返し語るのみで、その先が具体的に見えてこない。何故なら〈不在の男〉が姿をあらわしたとき、それは女性を他者化する封建的な家父長制の権力、また帝国の権力としてたち現れるからである。

金明淳は植民地地下にある祖国を、迫害される自分と同一視しながらも迫害する他者として、また自分を救う祖国として希求しながらも自分を追放する他者として二重に認識せざるをえなかった。

そうした点で田村俊子と金明淳とを比較してみたとき、ともに個人主義的な作家であるとして評されながらも、前者が渡加するまで国家に対して無自覚であったのに対し、後者がより国家や民族を意識し、それに翻弄されざるを得なかった点で、植民地下の女性の表現主体の立ち上げの困難さを考えずにはいられない。

## 【注】

※本稿の韓国語文献の日本語訳は特に表記していないかぎり論者によるものである。

※特に表記していないかぎりテキスト本文や随筆、評論などの引用は、「弾実 金明淳私愛する」（キム・サンベ編 図書出版ソルメ 一九八一年）及び「田村俊子作品集」全三巻（オリジン出版センター）により、旧字を新字に改め、ルビを適宜省略した。初出は脚注に記した。

※なお、韓国語の姓名の表記は現在韓国で発表される研究論文に漢字による姓名表記がされていないことが多いため、考察対象である一九二〇年代の作家及び批評家は漢字で表記し、研究者名はカタカナでの表記に統一した。

※本文では便宜上作品、単行本のタイトルを『で、雑誌・新聞を』で表記した。

- (1) 田村俊子「女作者」（原題：「遊女」）『新潮』大正二年一月
- (2) 金基鎮「金明淳氏に対する公開状」『新女性』第2巻10号、一九二四年十一月
- (3) リベッカ・コーブランド「告白」する厚化粧の顔——〈女らしさ〉のパフォーマンス——『うたの響き・ものがたりの欲望——アメリカから読む日本文学』森話社 一九九六年一月
- (4) 若桑みどり「性的二元論にもとづくイメージ・ステレオタイプ」『戦争がつくる女性像』筑摩

書房 二〇〇〇年一月（初出は一九九五年九月）

- (5) 選者である李光洙は「第一に詩文体による言文一致、第二に文学に対する非遊戯的で厳肅な態度、第三に勧善懲惡を超越した現実描写、第四に非現実的な観念思考を排除した現実の再現、第五に近代思想の反映など」（徐光云『韓国新聞小説史 一八八〇—一九七〇』ヘドジ 一九九三年 p.131）を選考理由にあげ、激賞している。また、後に金明淳をモデルに「作品無き女性文人」としてヒロインを描いた小説『金妍実伝』を発表した金東仁も、『疑心の少女』を評して金明淳を「気分というものを把握することができたただ一人」（金東仁『寂寞とした芸苑』、『毎日申報』、一九四一年九月二一日）として評価している。金明淳は生涯に約五十篇の詩、小説十八篇、感想文七篇、九篇の翻訳書を書いている。

- (6) その内容は、詩二十四篇、小説二篇、隨筆四篇である。詩集の刊行は、女性詩人の詩集としては最初であり、朝鮮の詩人としては朴鍾和、朱耀翰、下榮魯に続く四番目の刊行である。

- (7) キム・ギョンイル「近代の服を着た新女性の出現」『女性の近代、近代の女性』ブルンヨッサ 二〇〇四年七月

- (8) 金明淳「タンシルとジュヨン」（初出：『朝鮮日報』一九二四年六月十四—七月十五日付）

- (9) ミシェル・フーコー 渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社 一九八六年九月、川村邦光『セクシュアリティの近代』講談社選書メチエ86 一九九六年九月、同『オトメの身体』紀伊國屋書店 一九九四年六月、石原千秋『漱石の記号学』講談社選書メチエ 一九九九年四月等々を参照した。

- (10) 牟田和恵『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社 一九九六年六月

- (11) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社 一九九八年三月、金晃一 入佐信宏訳『植民地朝鮮の〈新女性〉——その他者認識とアイデンティティ——』『歴史評論』No.63 校倉書房 二〇〇二年四月、孫知延『民族と女性、ゆらぐ〈新しい女〉——植民地朝鮮における雑誌『新女子』を中心に』『青鞥』という場——文学・ジェンダー・〈新しい女〉（飯田祐子編）二〇〇二年四月等々を参照した。

- (12) 平塚らいてう『田村俊子さん』、『中央公論』一九一四年八月

- (13) 水野盈太郎『田村俊子女史に送る書』『文章世界』一九一三年六月

- (14) 金基鎮、同前。

- (15) 田村俊子は十八年間の北米生活の後日本に帰国するが、恋愛事件によって日本にしばらくなくなり、一九四三年上海に渡り、雑誌『女聲』を創刊する。そのまま上海で一九四五年終戦を見ずに路上に倒れ、病院に運ばれるが、二日後に死亡している。また金明淳は、その末年については知られておらず、知人宅に居候をしたり、あちこちを放浪したりしたのち、一九五一年頃東京の青山脳病院で死亡したとされている。

- (16) 田村俊子『簾の蔭から』『女学世界』一九二二年八月

- (17) 田村俊子『微弱な権力』『文章世界』一九二二年九月

- (18) 田村俊子『悪寒』『文章世界』一九一三年十月

- (19) 拙稿「田村俊子『女作者』論——誘惑する〈女作者〉——」『EGENS ジャーナル』No.3 二〇〇五年三月

- (20) ムン・オッピョ「朝鮮と日本の新女性——~~田村俊子~~と平塚らいてうの生涯史~~田村俊子~~」ムン・オッピョ他著『新女性——韓国と日本の近代女性像』チョンニョン社 二〇〇三年十月

- (21) 牟田・慎（牟田和恵・慎芝苑）『近代のセクシュアリティの創造と「新しい女」——比較分析の試み——』『思想』八八六号 一九九八年四月

- (22) 金晃一 入佐信宏訳『植民地朝鮮の〈新女性〉——その他者認識とアイデンティティ——』『歴史評論』No.63 校倉書房 二〇〇二年四月

- (23) CMセン「最近のわが社会の現象に感じて」『開闢』第9号 一九二二年三月号

- (24) 金一葉「私たちの理想」『婦女之光』創刊号 一九二四年四月号

- (25) 金一葉「私の貞操観」『朝鮮日報』一九二七年一月八日付

- (26) キム・ユンソン「また違う~~田村俊子~~——オールドミス・第二夫人・同性愛者」『韓国の植民地近代と女性空間』（テ・ヘスク他著）図書出版ヨイヨン 二〇〇四年六月

- (27) ヨンジャ「新女性の五大煩惱」『新女性』第3巻11号、一九二五年十一月 p.321

- (28) 注8に同じ。

- (29) 金明淳「私は愛する」『韓国文学大全集』第二九巻 太極出版社 一九八一年四月（初出：『東亜日報』一九二六年八月十七—九月三日付）

- (30) 「春香伝」ははじめ朝鮮の伝統音楽パンソリの唱物語として生成され、その後小説化された。十八世紀初頭に作られたといわれているが、作家、制作年などは未詳である。

- (31) 金明淳「振り返るとき」『生命の果実』漢城図書株式会社 一九二五年四月

- (32) イム・ウギョン「植民地女性と民族／国家想像」『韓国の植民地近代と女性空間』（テ・ヘスク他著）図書出版ヨイヨン 二〇〇四年六月

- (33) 金明淳「夢解きをした日の夜」『生命の果実』漢城図書株式会社 一九二五年四月

- (34) 金明淳「おまえ自身の上に」『生命の果実』漢城図書株式会社 一九二五年四月

- (35) 同前。

- (36) 同前。

- (37) 金明淳「タンシルとジュヨン」（初出：『朝鮮日報』一九二四年六月十四—七月十五日付）

- (38) フランツ・ファノン『地に呪われたる者』鈴木道彦・浦野依子訳みず書房 一九九六年九月（原語刊行は一九六一年）

- (39) ヨハン・ガルトウング 高柳先男（他）訳『構造的暴力と平和』中央大学出版部 一九九一年十二月

(40) 無名氏 「家庭の人としての女史」 『新潮』 一九一三年三月

(二〇〇六年一月一〇日受理)

The Expression of the Femininity and Imperialism :  
Through comparison study of works of Toshiko Tamura  
and Myung-soon Kim

KIM Minju

abstract

Toshiko Tamura and Myung-soon Kim flourished in 1910-20 in Japan and Korea. In those days it was an act of a man to write. The feminine was demanded above all to the thing which a woman wrote by the literary world and the society, so that woman does not invade a domain of a man. A lot of studies about that the motherhood is one of a model of feminine, it was used to mobilize a woman for war, while militarism advances. Then is what kind of position was there the femininity at socially and culture in Japan and Korea which had a relation such as an empire and a colony. A purpose of this paper is what did such a demand of feminine have influence on works and the strategy of two woman writer.

The work of Toshiko, "The woman author(ONNA SAKUSYA)", depicted a woman writer who immersed herself in "coquetry" by wearing white face powder as part of the creative process of writing novel. It is a unique method that the only woman was able to write, and "The woman author" became one of her representative work because the text is so feminine. But Myung-soon was criticized her work and her personality, too feminine to her mother was concubine that her work smell of face powder when a prostitute make up. A difference of evaluation for a work of two writers was a difference of a woman of an empire, or a woman of a colony.

And, it was same in Japan and Korea that the prostitute is perceived as immoral, a danger, a threat to 'normal' femininity and, as a consequence suffers social exclusion, marginalisation and 'whore stigma'. But, in the case of Toshiko she was married, and she write a "Woman author" like prostitute to express her identity, it was only a performance, not her personality. In the case of Myung-soon, she wrote to overcome 'whore stigma', but the man gaze did not forgive that, she cannot acquire her identity. This shows that the woman writing is not same, and it is difficult to acquire her identity in marginal.

Keywords : femininity, woman writing, colonialism, imperialism, the new woman